



六
花

9

2022

りっかはいくかい

秋の田に ◎ 山田六甲



秋そこに万年筆の吸ひ取り紙
傷受けしひたいに雨や薄山
軒下の燕も昨日去ににけり
太山寺脇の行く秋惜しみけり
日本に帰れば鳶の紅葉かな
まるまると太りし猫に団扇かな

石と石ぶつかり銀河はるかにす
咲き誇る萩に一湾隠れけり
松の木に猿の腰掛ふつくらと
豊の秋みはるかすなり西稲美
待針に刺されて秋のぎんやんま
雲漢の橋から橋へ織女かな
去年の去年朱鷺をみて来し悔少し
うつ伏せに術後の妻や秋暑し
戦なき世はもう来ない女満月
くべながら顔をそむけるキャンプの火
弁慶の硯にべきと桐一葉
しをれつつ雁来紅は色を濃く

俯せの色はかなしや茄子の花 磯野青之里

俳句は主情を表に出さない客観写生が大切だが、それを逆手にとった大胆な表現が良い。本来は「俯せの色」などはないが、「俯せに咲いている紫の花」で俯せは茄子の花に掛かる。その色をこめて詠んだのである。紫の色を好む人は病気であるという説を何かで読んだ。そういえば美空ひばりは典型的な紫色を好んだ。(六甲)

うつぶせのいろはかなしやなすのはな いそのあおのり

雪嶺抄

夢のつづき ◎ 笹村 政子

あめんぼの思ひもよらぬ後ずさり
 睡蓮やぼつと出でたるひとり言
 たなごころ返さば発ちぬ天道虫
 夕河鹿裸電球灯るころ
 河鹿鳴く川湯の宿の枕上み
 鴨涼しをみな一人のベンチかな
 かたつむり夕映え色の糞をして
 つまみ上ぐ亀の卵や梅雨近し
 風生れて滝をはみだす似非行者
 短夜や夢の続きは亡き娘出よ

河鹿鳴く川湯の宿の枕上み

かじかなくかわゆのやどのまくらがみ

「枕上・まくらがみ」は、「枕上に立つ」のよう
 に使、霊的なものが現れたことを意味するとい
 う。川湯は北海道をはじめ各地にあるが、掲句は川沿い
 にある温泉であろうか。寝床に横たわっていると河
 鹿蛙の美しい声が聞こえる。その声は子守歌のよう
 であり、霊を呼び寄せているようにも思える。その
 思いが「枕上」という言葉を引き寄せたのであろう。
 河鹿笛を聞きながら眠りに入ると亡くなったお嬢さ
 んかご主人が枕上に立って、そこで夢が覚めた。も
 う一度寝直すから、もう一度枕上に立つておくれと
 いう切ない願いの句である。

蚩袋 ◎ 志方 章子

滝音につつまれてゐる無心かな
 滝風に吹かれしばしを居眠れる
 口開けてゐるに気付かぬ滝見かな
 山梔子に捧げむ無垢という言葉
 若き日に戻りし気分ソーダ水
 河鹿笛ともに聞きたる夫は亡し
 三人の子の目苺を睨みゐる
 あぢさゐや母の記憶の日々薄れ
 蜜柑の花や童謡を口ずさむ
 蚩袋うつむく外はなきものか

蚩袋うつむく外はなきものか

ほたるぶくろうつむくほかはなきものか
 ホタルブクロはかならず俯いて咲く。上を向いて咲くことはできないだろうか、という花と自らへの問いかけの句。蚩袋の花への問いかけは自らへの問いかけでもある。しかし袋の中へ入る蚩の立場になったら、雨露をしのげるのだから有り難い花と言わざるを得ない。そのことからうつむいて咲く花をあれこれ調べて、いろんな考察が出来る。皆様の句から様々な示唆がいただけるのでありがたい。神戸大学の丑島研究室によると、「植物が光の方向に向かって屈曲する「向日性」の研究は数多くあっても、花が咲く向きに関する研究例は少ない。そうで花は目にしない日はないほど身近な存在だが、生態には未知の部分も多く、それがまた花の魅力を増しているそうだ。

はまなす抄

山梔子の錆びる日 ◎ 升田ヤス子

をさな子のぽきりと折りし淡竹の子
 筍を掘れば兜の幼虫も
 何か怖ろし梔子の錆びる日々
 故郷や山百合咲くが見えてきて
 蚩烏賊碧きガラスの皿に盛る
 巢燕のとよもす市場糶休み
 白じらと終焉なるや茉莉花は
 石斛や神苑昼をほのぐらく
 地方紙を読みぬ長野のキャベツ着き
 柚の花の白し何か飛ぶ気配

何か怖ろし梔子の錆びる日々

なにかおそろしくちなしのさびるひび
 山梔子(くちなし)の花はすぐに茶色く変色してしまふ。花の中にはゆつくりと朽ちてゆくものや、すぐに散つてしまふものなど様々だが、その様子は古来より、「もの哀れ」にたとえられて、滅びの美学諦観を刺激する。日本人でいえば、判官鼻肩や近松門左衛門の心中ものなど人形浄瑠璃、狂言芝居に人氣が集まるのも頷ける。そういう哀れなものの立場になるのに恐怖心を抱いているのだ。また来ていない未来には無数の可能性があり、うまくいく可能性もあるのにネガティブにばかり考えてしまふ「悲観的」な考え方で、私もよく指摘されることだが、場合によっては文学的思考も発達する場合もある。で前向きに生きなさいと心理学者に指摘されたこともある。作者の場合は病気や家族など様々な原因があるだろうが、俳句は自らを客観的に眺める事ができる効用も多い。

荒草の谷 ◎ 善野 行

荒草の谷に鉄砲百合点る
 明け方のうつけうちたる不如歸
 竹の子に藪を洩れたる日の当たる
 新生姜鼻から憂さの晴れにけり
 あぢさゐのころのいろをみてをりぬ
 南天の花にすがしき朝かな
 花栗のほひ鼻腔に暴れけり
 椎の花風吹き渡る法華山
 薔薇園に嬰兒^{あんじん}安心の夢の中
 一面の向日葵に宙ゆがみけり

こうそこのたにてつぽうゆりともる
 荒草はあれはてた草地。私はむしろ行く手の美しい鉄砲百合を受けるのだから「あらくさ」と読みたい。荒草とは生いしげる雑草。禅宗では悟りに至る前の無明（むみょう）の喩に用いる。仏教では「元品の無明」とも言ってもともとと備わっている迷いをいう。「もうすぐ悟る」というときに起きる迷いで、最期まで全つでできないこと。そういう時に眼前に現れた救いのともしびのような鉄砲百合が咲いて足元を照らしてくれると譬えたのか。荒はてたヤブを歩いて茅で手や顔を傷つけながら前に進む文芸の道であるような気もする。実生活でも田んぼに近く道は夏草に遮られながら進むのであろう。夢風撰候補。▽薔薇園の句「安心（あんじん）」というのは森澄雄が俳句に取り込んだ読み方だが、その後岡本高明などが使っている。常日頃からあるはずの不安に向き合わず、或いはふたをしたり、目をそらしたり、気にしなかったり、重大に考えなかったり、まるでその不安が無いように考えてしまふ。そして、その不安が無いことが、「安心（あんじん）」澄雄は「死（の？）ぬ病得て安心や〇〇」下五は忘れた。取り合わせの句は忘れやすい欠点がある。が、掲句はその安心とはちがうだろう。

野遊抄

石斛の花 ◎ 住田千代子

今年竹松山城は天にあり
 一面の畑は継ぎ接ぎ麦の秋
 石斛の花に微笑む目元かな
 見晴るかす瀬戸内けぶる花樗
 蚕豆の莢ふくよかにくびれあり
 たつぷりの苺が嬉し誕生日
 滝壺にとんちんかんな返事かな
 サプライズを蛸袋は知つてをり
 いちご狩り頭上に蜂の羽音あり
 滝音を離れて髪を整へり

石斛の花に微笑む目元かな

せつこくのはなにほほえむめもとかな
 石斛は山地や岩場に見られる小型の着生ランで。四国の実家では母が厨の窓に吊って楽しんでた。水は頃合いをはかって時々台所の水を茶碗やコップで水をやっていた。視線より少し上に吊っているので水をやりながら目元が微笑んでいたのを掲句で思いました。私には子どもころからなじみの深い蘭である。俳句の場合、誰それと言っていない場合は作者自身として鑑賞するのがいいから、微笑んでいるのは作者であろう。本種は薬用にされることから、記紀神話の医療神である少彦名命（すくなひこなのみこと）にちなみ、少彦葉根（すくなひこなのかすね）の古名も持っている。滝音の句も佳い。夢風撰候補。

燕の子 ◎ 永田万年青

初夏や豪華船抜く海神丸

梅雨入前二十種の菓小分けして

信号を待つ川風の涼しかり

狭き巢に五羽の子燕口開けて

ビオトープ水面をまはる燕の子

初夏や水平線に豪華船

半袖に川風入りぬ日暮れかな

あぢさゐの飾らる机りハビリ室

虫喰ひの葉にも一輪薔薇咲けり

睡蓮の時に紅色ありにけり

ビオトープ水面をまはる燕の子

びおとーぷみなもをまわるつばめのこ
ビオトープとは辞書によると、動物や植物が恒常的に生活できるように造成または復元された小規模な生息空間。公園の造成・河川の整備などに取り入れられる。「ギリシャ語で生物(bios)と場所(topos)を示す造語」万年青の近くの海辺にあつて、かれは題材を探しによく行く。そこで見た光景を句に詠むのだが、そろそろ万年青も地名や施設の場所を詠み込まずに句に出来るようになればどうだろう。ここでは燕の子に目を向けているので燕の子に集中して多く詠んでみるのも力をあげる機会になるのだ。そうするともっと見えて来るものがあるはず。見えて見えないもの見えていて見えないものなど深みが出てくると思う。虫食ひの葉にも一輪薔薇咲けりは夢風撰候補。

あと一句 ◎ 出口 誠

父の日の特別なこと何もせず

父の日や洗濯したる父のみて

ハンバーグステーキで飲むビールかな

父の日を刺身で祝ふ息子かな

からあげでビールがうまし日曜日

大いなる赤きまんじゅう七変化

昼寝覚ばんやりしたる後頭部

夏の昼地震のニュース入りけり

夏の昼津波はなしといふニュース

あと一句その一句なり夏の昼

あと一句その一句なり夏の昼

あと一つくあと一つくなりなつのひる
そう唱えながら一句をひねり出そうと汗滂沱なのであろう。何句までかはスムーズに詠めたが、あと一句というところではたと思考が止まった。記録も塗り替えられる時には一時一旦停止することは多い。大記録となればなおさら、俳句においてもや。しかし不思議なもので懸命に努力していると予想外の処から光明が射す。誠君もあきらめずに努力しているから、文芸の女神が微笑むのであろう。そのよくな経験をしているとすべてにおいて強くなる。強くなることは微笑むことだ。「人間の一番強い姿は笑顔」だとすでに中年になった孫が言っていた。夢風撰候補。

瀧飛沫 ◎ 谷日 一献

麦の秋天に金波を放ちけり

ふふみたきほどに真紅な蛇苺

淡路にて一期一会のいちご狩り

湯煙のごと岩伝ふ瀧飛沫

滝水の打てば応えて岩かづら

父の日や親子の絆まだ強し

揺れて見ゆ檸檬の花の毛虫かな

淑やかに纏れてをりし水中花

かにかくに冷酒の恋し季節かな

風死すや堪えかねしこと多かりし

湯煙のごと岩伝ふ瀧飛沫

ゆげむりのごといわつたうたきしぶき
瀧が高いと水も霧のように細かくなつてしぶくが
この句は湯煙のようだと言つた。瀧の飛沫が細かく
て落ちるといふより上つていくようなのだから。そ
ういう瀧は柳田国男の故郷七種の瀧(なぐさのたき)
だと思ふ。雨のすくない季節は瀧としての姿を消し、
雨後などには一献のいうような瀧が姿を現すから、
幻の名瀧と我々は詠んでいる。昔ことりとよく行つ
たが、その後延川夫妻、冷泉花さんとも行つた。私
は足がよれよれで幾度か落ちそつになつたが助けて
もらった。落ちてもいいから見に行きたいと思ふ瀧
である。二番目は鳥海山の白糸の瀧。夢風撰候補。

タジツサ抄

アイリス ◎ 田尻 りさ

空蝉を百も抱へるビルの壁

蝉鳴かぬ炎暑の街の静もりぬ

横移動してまた鳴くや油蝉

かき氷ひと押へしてまた積みり

鈴虫の軍隊回れ右をして

アイリスを活けて私と向き合へる

真夜に蝉一言鳴けり君思ふ

夏立つや昭和の重石負うたまゝ

冷凍の鰯の頭敷へ投ぐ

肩口を舐めて確かむ汗の味

アイリスを活けて私と向き合へる

アイリスをいけてわたしとむきあえる
アイリスは、ギリシア語で虹を指す「イリス」に
由来する言葉。りさの故郷熊本では肥後アヤマなど
が有名。そのアイリスを主人公と向き合うように活
けた。いや、活けたら向き合うように向きが変わつ
たのだ。私という作者はアイリスを活けて様々な思
いを巡らせているのだから。りさの故郷水前寺公園
や若い頃にも思いを馳せて居るにちがいない。それ
がつまり自身と向き合うことである。さまざま雑
念がアイリスによって浄化されていくのである。生
け花の心得。▽夜蝉が一声鳴いたという句も、その
夜蝉によって忘れていたあることが蘇つて来た。夢
風撰候補。

おばけだぞう ◎ 広畑 育子

栗の花おばけだぞうと言ひにけり

用水の堰を越えむと梅雨鯨

筍狩車の窓の総ぐもり

筍狩手を止め眺む著莪の花

夏空や風に流されぬ雀

乾きぬる畑飛燕の影濃かり

百合の花酒の肴になる漢

鳴く蛙みな雄と知り鬱陶し

朝の歩に茅花をしがむ戦中派

ほうほうと風音楠の花揺るる

栗の花おばけだぞうと言ひにけり

くりのはなおばけだぞうといいにけり
「おばけだぞう」というフレーズで村田喜代子の小説を思い起こした。87年、「鍋の中」で芥川賞を受賞した村田の書いた小説「お化けだぞう」は「潮」に連載されて、木が夜中に歩いたりする物語でとびとびに読んだが面白かった。村田の小説から取り込んだのかは不明だが、文芸から積極的に句に取り込むのは私は賛成。芭蕉だって中国古典や唐詩からも取り込んでいるし。何ら悪いとは思わない。栗の木の形状や噓せるような臭いからして「お化けのようだ」と連想するのも読者を刺激してくれる。どのようなた材料でも句に取り込む意欲が嬉しい。夢風撰候補。▽筍（たけのこ）狩りの帰りに車に積んでいる筍のいきれで窓が曇ったのである。この句も印象深い。「言ひにけり」を「揺れにけり」くらいに止めておいた方が…。

須磨の奥抄

義母の手 ◎ 草場つくし

手作りの歪んだ碗や新茶の香

検査後の安堵の二人新茶汲む

義母の手を真似て包みし柏餅

下町のバケツの鉢に咲く牡丹

はらはらと指で弾かれ散牡丹

控へめな庭に一輪紅牡丹

一斉に目高餌へと浮き来たる

万緑へ赤いおニューのスニーカー

野苺の潰れてゐたるポツケかな

雨粒を受けて優しや花水木

義母の手を真似て包みし柏餅

ははのてをまねてつつみしかしわもち
掲句の柏餅を包む葉はおそらく山帰来の葉である。
柏餅には柏の葉を用いるのと、山帰来（さるとりいばら）の葉を用いるのと二通りあると思うが、掲句のように破れることなく綺麗に包む方法を義母の真似して上手く包めたころを端午の節句が近づくと思い出す。

こういう伝承はその家独特の調理方法や新妻へと受け継がれて日本の伝統が繋がっていく。材料は同じでも家によって微妙に違う。それが母の味になる。私の子どもころは家の前の大島桜の葉でも包んでいたから、柏餅は三種類であった。▽野イチゴの句も幼児らしさがあふれて句いまで漂う新鮮な句。「ポツケ」とは「ポケット」の変化した幼児語。彼女は幼稚園の先生をしていた体験からできたか。それともお孫さんかも。夢風撰候補。

茄子の花 ◎ 磯野青之里

宙を舞ひ飛び込む獲物鯉船
 折り取れば音かはいらし淡竹の子
 背伸びして届く若さや柿若葉
 虚構なるアクアリウムに飼ふ目高
 制空権握る小蠅や台所
 大洋の波風光ヨット渡航
 野仏へ匍匐前進かたつぶり
 葉の上に雄花は立てり瓜の花
 早苗田や田ごとに伸びる用水路
 俯せの色はかなしや茄子の花

俯せの色はかなしや茄子の花

うつぶせのいろはかなしやなすのはな
 野菜の花はおおむねうつ伏せに咲く。茄子はとくにその色と咲きかたが哀しいよ、といつのである。淡い紫色で、芭蕉の詠んだ合歡の花と西施を連想するが、西施が河を覗き込んでいると、浮いてきた魚が西施の美しさ息が出来ぬほど我を失い溺れて沈んだという故事伝説がある。花が下を向いて咲くのは虫が近づきやすいのと花を見つけやすい理由があるが、それではただの科学的分析に過ぎず文芸上は作者の言うように、もののあはれ（もののあわれ、物の哀れ）は、文学的・美的理念の一つで折に触れ、目に見、耳に聞くものごとに触発されて生ずる、しみじみとした情趣や、無常観的な哀愁。夢風撰。

日記抄抄

てんと虫 ◎ 浜田久美子

坂の上に来れば祝ひの鱧の膳
 坂道を登りて祝ふ鱧の膳
 筍を食めば山風さらさらり
 てんと虫小さな手へと移しけり
 古稀越えのスポーツカーぞ青田風
 白鷺のどこまで白き青田かな
 どこまでも青田播州平野なり
 病む夫の頬擦りやる青葉風
 心病む夫の涙や柿若葉
 一輪の百合咲く夫の入院日

てんと虫小さな手へと移しけり

てんとむしちいさなてへとうつしけり
 子どもとか孫とかいわずとも小さな手へと移した
 というだけで十分に作者の意図は通じる表現。夢風撰候補。難しい言葉や表現を無理して使わなくても俳句はできる。針小棒大という言葉があるように針小のところを詠んであとは読者に手渡せば十分に俳句は機能するお手本である。昔はよく俳画について語ったことがある。たとえば金魚の画を描くとき金魚の一部を塗ればだれも一部だけが赤い金魚とは観賞しない。俳句も同じ。「掲句の小さな手へ」といえば大きな（大人の）手から子どもか幼児の手へとてんと虫を渡してやったことが分かる。孫とか子とか言わなくてもいいのだ。掲句の内容はいたって簡単だが広く大きなことを背景に持っている。俳句、発句の原点である。▽一輪の百合が咲いた日に夫が入院したという句は俳句の効用である。何月何日に入院したというよりも後々に思い起こせるのである。